

記者発表（資料配付）				
月／日	担当部署	電話番号	発表者名 (担当名)	その他 配布先
3／31 (月)	兵庫県立円山川公苑	(0796)28-3085	公苑長 児島 克巳 (課長 新田 理)	—
	総務部秘書広報室 秘書課儀典室	(078)362-9379	儀典室長 上野 健全 (儀典班長 谷口 貴紀)	

兵庫県立円山川公苑美術館 令和7年度展覧会

「兵庫県公館コレクション展」の開催

兵庫県立円山川公苑美術館において、兵庫県公館が所蔵する日本画・油彩画・版画・彫塑作品などの展覧会を下記のとおり開催します。

兵庫県公館は、明治35年（1902年）、明治を代表する建築家である山口半六がフランス・ルネサンス様式により設計し、四代目県庁舎として誕生した歴史的文化遺産です。戦災による内部焼失や有識者らによる保存運動を経て、昭和60年（1985年）に、賓客の接遇、県政の重要な式典などに利用する“迎賓館”に生まれ変わり、以来、数多くの芸術家たちの協力を賜りながら芸術作品の展示を行ってきました。

兵庫県公館が所蔵する芸術作品のうち、昭和を代表する日本画家の東山魁夷、永きにわたり日本の洋画界に大きく貢献した小磯良平をはじめ、伊藤清永、金山平三、横尾忠則など、兵庫県に深くゆかりがある芸術家たちの名作の数々を、兵庫県立円山川公苑美術館にてご堪能ください。

記

- 会 期 令和7年4月25日（金）～11月3日（月） ※会期中は無休
開館時間：午前9時～午後5時
- 会 場 兵庫県立円山川公苑美術館（豊岡市小島 1163）
- 観覧料 大人 350 円／70 歳以上 150 円／高校生以下無料
（団体割引、障がい者割引あり）
※「ひょうごプレミアム芸術デー」期間（7月9日～15日）は観覧無料
- 主 催 兵庫県立円山川公苑・兵庫県公館

<問い合わせ>

▶ 展覧会に関すること

兵庫県立円山川公苑 TEL：(0796)28-3085

▶ 兵庫県公館に関すること

兵庫県総務部秘書広報室秘書課儀典室 TEL：(078)362-9379

展示作品一覧（計 26 点）

	作品名（種類）	作 者	
1	寛裕 （洋画）	伊藤 清永	明治 44 年出石町（現豊岡市）に生まれ、14 歳の時から油絵を始め、昭和 3 年愛知中学校を卒業後、画家を志し上京、岡田三郎助の主宰する本郷研究所に通う。同 4 年東京美術学校西洋画科に入学し、在学中に帝展で入賞するなど若い頃から天賦の才能を発揮した。同校卒業後も文部省美術展や日展等に意欲的に出品し、日展で入選を重ねるとともに特選や総理大臣賞を受賞するなど、数々の栄誉に輝いている。一貫して豊満で色鮮やかな裸婦人物の制作を続け、華麗な女性美を繊細な筆触の積み重ねと艶麗に輝く色彩で表現する独自の絵画美の世界を確立した。
2	鷗盟 （書）	伊藤 博文	天保 12 年、山口県東荷村の農家に生まれ、14 歳の時、足軽伊藤家の養子となり、松下村塾に学ぶ。新政府誕生とともに、慶応 4 年 1 月、東久世通禧の随員として兵庫に着き「神戸事件」（備前藩士滝善三郎が三宮で外国水兵を殺傷した）を処理した。その後、外務全般を取り仕切り、慶応 4 年 5 月 23 日、初代の兵庫県知事となった。国家統一の体系を整えて 6 カ条を掲げて当時の首脳者に建白、これは伊藤の「兵庫論」として話題を投じた。明治 18 年内閣制度をつくり、12 月には自ら初の総理大臣、のちに宮内大臣、外相を兼任し、首相として 3 度の国政に参画した。
3	赤いブローチ （日本画）	大橋 良三	大正 4 年神戸市に生まれ、京都市立絵画専門学校在学中に上村松篁に師事し、兵庫県展に出品して佳作賞を受賞する。卒業後、神戸市内の小学校や国民学校の教員を歴任し、県立第四神戸中学校、県立神戸高校の教諭として勤務しながら、日本画家として人物画に優れた作品を発表して、各地の美術展に入選している。昭和 27 年には「郷土作家日本画展」を機に県下に日本画家に呼びかけて「兵庫県日本画家連盟」の設立に関わり、後に委員長を経て理事長となり、日本画の振興に貢献した。
4	野母崎の港 （洋画）	尾田 龍	明治 39 年姫路市に生まれ、昭和 6 年東京美術学校本科西洋画科卒業。在学中より、二科展、国際美術協会展、1930 年協会展に出品した。また、昭和 4 年に「雨後」「麥畑」を出品して、国際美術協会賞を受賞した。同 15 年より国画会に出品、同 21 年姫路市展創設のため委員となり、同展にて市長賞を、同 27 年国画会に「ピアノの前の少女」「牛」を出品して会員に推挙されるとともに、姫路市展にて文部大臣奨励賞を受賞した。画材は広く、中近東、ヨーロッパ、アフリカにも及び、製鉄所を主題とする連作 50 点のほか、県下では、家島を中心とした海浜風景が多い。
5	風の海峡 （洋画）	片岡 真太郎	大正 15 年大阪市に生まれ、関西学院大学在学中に第 2 回行動美術展に初出品し入選、その後も各種美術展に出品し、入選を果たした。昭和 40 年高橋和己の「邪宗門」挿画執筆を担当したことを契機に抽象の熱い美が具象の柔らかく繊細な表現と一体となって、ひとつの振幅なり、表裏なりの深まりを形づくることになった。作品は、柔らかな色彩で日本の原風景描いており、余白・間といった空間の東洋的哲学を取り入れた独自の油彩画を構成している。
6	琉球壺屋 （洋画）	金山 平三	明治 16 年神戸市に生まれ、東京美術学校時代黒田清輝の指導を受ける。大正 5 年の文展に初出品し特選第二席となり、次年も特選第一席と出品 2 年目で世の注目を浴びる作家となり、大正 8 年の帝展の際、最年少(39 歳)で審査員に選ばれた。日本各地を旅しての四季折々の景観など、自身の人格を現した清明な風景画を描き、中でも東北の雪景色をテーマにしている。昭和 10 年の帝展騒動の際、画壇との交渉を断ち、制作に打ち込み、昭和 19 年帝室技芸員を拝命、戦後、昭和 31 年作品展を開き、翌 32 年芸術院会員に推挙された。
7	神戸風景 （洋画）	兼行 武四郎	明治 36 年山口市に生まれ、兵庫県御影師範学校に奉職し、昭和 45 年に画業に専念するまでの間、43 年間にわたり卓越した指導力をもって多くの人材を養成した。多くの画家たちの芸術的才能を開花させるとともに、日本画壇の第一線で活躍した。 創作体験を美術教育に生かし、自然の豊かさと、その真実の姿を表現しようとする写実絵画の指導や指導方法の実践的研究に情熱を注ぎ、県下のみならず美術教育全体の発展と向上に多大な貢献をした。

	作品名（種類）	作 者	
8	露台 （版画）	川西 英	明治 27 年、神戸市兵庫区生まれ。初め油絵を志し、山本鼎の創作版画に刺激され、版画の世界に入る。作品「古道具屋」、「秋光」がニューヨーク近代美術館に、「オーケストラ」、「池」、「天の橋立」がボストン美術館に買い上げられるなど海外においても高い芸術的評価をうけた。生涯神戸を愛し、神戸の風景を描きつづけて、「神戸百景」、「新神戸百景」を、さらに病軀を押して県下をくまなく歩き「兵庫百景」を完成。巧みな構図と鮮烈な色彩の作品は、創作以外にもマッチ、包み紙、雑誌の表紙など芸術に大衆性を盛り、多くの人々に親しまれた。
9	神戸ベイスайд （版画）	川西 祐三郎	大正 12 年神戸市に生まれ、創作版画家 川西英の三男として生まれ、8 歳より父に師事して木版画の制作を始めた。父の技法を直系として継承しながらも、造形面においては新しい形態感覚、動勢により極度に省略された色面構成を効果的な黒でまとめた独自の作風を確立した。東京国立近代美術館、大阪府立現代美術センター、姫路市立美術館などに作品が収蔵されている。さらに、版画教育にも熱心で、昭和 63 年から 3 年間、兵庫県立近代美術館で木版画教室の講師を務め、地域文化の発展に尽力するなど、美術の振興に貢献した功績は誠に顕著である。
10	KOBE, THE AMERICAN HARBOUR （洋画）	小磯 良平	明治 36 年、神戸市生まれ。的確なデッサン力と知的な構成、抑制されたデリケートな色彩によって高雅な絵画世界を生み出すなど近代写実絵画の完成者として高く評価されている。 当作品は、昭和 60 年の県公館の開館を記念して作成したタペストリー（県公館 3 階）の原画であり、県庁舎として完成した明治 35 年当時のメリケン波止場を想像して描かれたものである。タペストリーは、京都西陣織（つづれ織で、縦糸が麻、横糸が絹）で、製作中も小磯画伯自身が工場に度々足を運び、約 100 日かけて 25 倍（3.5m × 5m）に織られたものであり、現在も県公館のシンボルとなっている。
11	千刈水源池の春 （日本画）	菖蒲 大悦	明治 35 年佐賀県に生まれ、日本美術学校日本画科で人物、風景、花鳥を主に修業するかたわら橋本静水に師事し、卒業後、神戸に移り西村五雲、中村岳陵に師事する。 昭和 24 年日展入選、以来 10 年連続入選する。長年にわたり画業に精進、日本画家として人物画及び風景画に輝かしい画境を拓き、風物の美しさを広く紹介している。また、“群青社”を創立、主宰として多くの門人の指導育成に尽くし、昭和 41 年より 5 ヵ年の歳月をかけて、姫路名古屋山仏舎利内陣大壁画、五祖師総伝十三面を完成させた。
12	MARINA-P （彫塑）	新谷 琇紀	神戸市に生まれ、幼少時から父 新谷英夫の影響を受ける。兵庫県出身の彫刻家 柳原義達氏等に師事し、本格的に芸術の道を歩む。研鑽の傍ら自分の進む道は人々に感動を与え、愛される作品こそが優れた彫刻だと考え「愛」をテーマに数々の作品を発表している。昭和 47 年、神戸三宮に設置した「アルパ像」（黎明）の制作をはじめ、地域の芸術文化の振興に多大に貢献している。平成 14 年 5 月に貝原元兵庫県知事の肖像を制作、歴代知事の肖像と共に県公館に展示、氏が誇る写実的な彫刻で県民に親しまれ高い評価を得ている。
13	作品 1964 白（縄文曼陀羅） （洋画）	須田 剋太	明治 39 年埼玉県北足郡吹上村（現鴻巣市）に生まれる。昭和 12 年第一回文展に「休憩時間」を出品、以後出品を続け、同 22 年第 3 回日展において「ピンクのターバン」で特選。その後、具象画、抽象画の双方を志向する前衛的な画家として、国内外で活躍。また、その独特の画風が関西洋画壇に与えた影響も大きく、児童画研究、新聞・雑誌などの挿絵にも新生面を拓いた。戦後は西宮に在住し、市内小中学校で美術指導するとともに、西宮市民美術教室の指導者、西宮美術協会の会長を務め、県下の文化の振興発展に大きな業績を残した。
14	ニースの太陽 （洋画）	田村 孝之介	明治 36 年、大阪市生まれ。大正 4 年より神戸市六甲に住み、中之島洋画研究所の講師をつとめるかたわら、研究所を開いて多くの洋画家を育てた。戦後は、神戸洋画会に参加出品するとともに、研究所を「六甲洋画研究所」として再建、後進の指導育成に熱情を傾けて県下美術界向上に貢献した。さらに昭和 22 年「二紀会」の創立には創立委員として尽力、同 49 年社団法人「二紀会」の理事長に就任。ことに、戦後の創作活動はめざましく、「スペインの女」、「セニョリータとギター」、「シシリー風景」などを発表するとともに、大阪コマ劇場、神戸国際会館、東京厚生年金会館の緞帳も製作した。

	作品名（種類）	作 者	
15	御嶽ご来光 （日本画）	土肥 武雄	明治 41 年三木市に生まれ、京都市立絵画専門学校本科で学び、福田平八郎に師事した在学中から芸術家としての頭角を現し、昭和 5 年帝展入選・国際美術展推奨作品となり、ドイツ、フランス、アメリカに出品する。同 6 年同校卒業後、中学校や高等女学校の教諭として指導に当たり、また、兵庫女子短期大学デザイン科教授としてデザイナーの育成にあたるなど長年にわたり美術教育に専心し、卓越した指導力を発揮、数多くの後進の育成に努めた。
16	メトロのホーム （洋画）	西村 功	大正 12 年大阪市に生まれ、昭和 23 年帝国美術学校卒業後、西宮に住み、田村孝之介に師事。同 25 年二紀展に出品し初入選し、二紀会同人となり、二紀展を中心に活動を続け、昭和 41 年安井賞を受賞する。生まれながらにして音の世界を知らないというハンディキャップを持ちながら、その作品は、喧噪の中で働く人々を温かい目で見つめ、庶民の哀感と叙情を幻想的な色彩で美しく描いている。特にパリのメトロに集う人間像を描いた作品群は詩情に溢れ、高く評価されている。
17	新雪の雪彦 （日本画）	昇 外義	大正 14 年富山県高岡市に生まれ、昭和 25 年、京都市立芸術大学日本画科を卒業、神戸市の小学校美術教諭や夙川学院短期大学教授として美術教育にあたるかわら、日本画の創作活動を行った。絵の基本となる「線」を大切に、兵庫県民にとって身近な存在である六甲連山を主テーマにして「線」の繊細な強弱により自然の生命の美を克明に描き出した作品は、幽玄の世界へ見る者をいざない、自然の神秘と感動を伝えた。神戸芸術学林の設立に参画したほか、自ら神戸日本画研究会を主宰し、長年にわたって県下各地で後進の指導を続け、文化の振興に尽力した。
18	フィヨルド （日本画）	東山 魁夷	明治 41 年横浜市に生まれ、3 歳のときに神戸に移り、県立神戸第二中学校卒業後、東京美術学校日本画科に進む。在学中の昭和 4 年第 10 回帝展に初入選し、その後も 13 回展まで入選を重ねた。戦後は日展を作品発表の場とし、昭和 22 年に特選、同 31 年には日展出品作により日本芸術院賞を受ける。その後も日展評議員、審査員、理事、理事長の要職を歴任する。昭和 35 年東宮御所の壁画「日月四季図」を、同 43 年皇居新宮殿の壁画「朝明けの潮」を、平成 2 年天皇の即位に伴う大嘗祭で皇居豊明殿を飾る「悠紀地方風俗屏風」を完成させた。
19	誰知明月 （日本画）	水越 松南	明治 21 年神戸市に生まれ、京都市立絵画専門学校本科・研究科卒業後、「新日本南画」創造に自己の道を求め、大正 10 年小室翠雲が日本南画院を創設すると第 1 回展から出品、第 10 回に出品した「化粧」はアンドレ・マルロー、第 15 回の「虎穴図」はジャン・コトーの称賛を博した。富岡鉄斎とフランス後期印象派の絵画に刺激を受け、人間、動物、自然を愛し、慈悲に満ちた心が独特の幻想絵画を生み、自分の描きたいものだけ描く自己に忠実であったことから、寡作の画家であるが、帝展等に出品された作品は名作の評価も高かった。
20	岬に住む （日本画）	宮崎 亮吉	大正 5 年岡山県に生まれ、18 歳で日本画を始め、第二次世界大戦後、会社勤務のかたわら日本画の創作活動を始め、川崎朱堂や森月城に師事する。昭和 40 年会社を退職後は日本画の創作と指導に専念する。同 45 年に日展初入選し、以後 63 年までの間に日展に 10 回入選している。昭和 45 年に兵庫県日本画家連盟副委員長を経て参与を努めるほか、県展や県下各市展の審査員を歴任するなど、日本画の振興と県下各地における後進の指導に精力的にあたった。
21	トレド風景 （洋画）	元川 嘉津美	明治 38 年広島市に生まれ、大正時代初めに神戸に移住。父の家業包装材店を手伝いながら大阪信濃橋洋画研究所で、小出檜重、黒田重太郎などの指導を受ける。昭和 3 年二科展初入選、以後毎年出品し、同 17 年二科会会友に推挙され、戦前の画壇で活躍する。同 26 年より一水会展に出品を続け、同会の常任委員となる。堅実な素描と油絵の本質の一つである質感(マチエール)の充実を追求した重厚な描法により元川調といわれる具象による独自の画壇を拓いた。

	作品名（種類）	作 者	
22	麦笛 （日本画）	森崎 伯靈	明治 32 年姫路市に生まれ、家業の農業を手伝いながら、東京から“ 絵画講習録 ” を取り寄せ、通信教育にて独学で絵を習った。20 歳頃に俳人の河東碧梧桐らと知り合い俳句を始め、シラサギ俳壇の会員となり、俳句とともにふるさとの農村風景をモチーフに牧歌的な独自の画境を深めた。日本美術展等に出品し、入選、特選ののち日本美術院院友となる。その画風は田園牧歌調で叙情味あふれる雅趣であるが、半面、生活体験を通して農民の働く姿の素晴らしさを詩情豊かに表現した土の匂いのする素朴な描写を得意とし、季節感あふれる画面には俳句の感覚が反映していた。
23	鳩 （彫塑）	柳原 義達	明治 43 年、神戸市栄町通に生まれ。昭和 28 年渡仏、帰国後は独自の造形理論を作品に投影させ、強靱な構築性をもったヒューマニスティックな具象彫刻を次々に発表し、生の証たる造形を求め続ける。作品の多くは女性像のほか、ハトやガラスをモチーフにしたもので知られ、人間の存在、生の根源を迫及し、独自の世界を切り開いた具象彫刻界の重鎮として活躍する。昭和 36 年、母校である長田高校校庭に作品を展示以来、神戸市内だけでも 20 作品が屋外展示されるなど、本県の美術の振興に貢献した功績は誠に顕著である。
24	ROGER AND ANGELICA 19 （洋画）	横尾 忠則	昭和 11 年西脇市に生まれ、高校時代からポスターを手がけ、地域の展覧会に多くの作品を出品。昭和 31 年神戸新聞社に入社、グラフィデザイナーとして出発し、同 35 年東京に移り、本格的にデザイン活動を開始する。横尾調といわれるサイケデリックで前衛的な独自のイメージを打ち出し、アングラ演劇唐十郎の「状況劇場」や寺山修司の「天井桟敷」のポスターを制作するなどポスター、装幀、レコードジャケット、イラストレーションから舞台美術、環境デザインに至るまで多彩な活動を展開し、爆発的な人気を呼ぶ。
25	脚をのばした幼い麒麟 （彫塑）	淀井 敏夫	明治 44 年、朝来町（現朝来市）生まれ。昭和 6 年、第 12 回帝展に「男立像」を初めて出品し、入選する。同 15 年東京にアトリエを構え、国画会展や二科展、文展に出品し、同 23 年の二科展に出品した「老人胸像」が二科会特別賞を受ける。その後、二科会会員となり二科展を中心に発表を続けるとともに、同 54 年から常務理事として、平成 10 年からは理事長として会の発展に尽くした。一貫して人物や動物などを叙情的に表現した具象彫刻を展開し、石膏直付け法による粗い溶岩のような肌を持つ、瘦身のフォルムを確立し、独自の造形をダイナミックに繰り広げた。
26	羊飼いの女と羊のいる風景 （洋画）	レオン＝ オーギュスタン・ レールミット	1844 年、フランスの農家に生まれ、農村での生活体験を生かして農民の生活や田園の風俗等を感じ傷的な情感を込めて描き出した。ルコック・ド・ボアボードランの弟子となり、20 歳の時、サロンに木炭素描の連作でデビューして好評を博した。89 年のパリ万国博覧会で金賞を射止めた。 19 世紀初頭にかけてのバルビゾン派の影響の中で自己の芸術を開花させ、特にミレーに強く感化され、傾倒していった。働く農民の姿を描いた作からは牧歌的で甘美な感傷性が漂っている。 （作品は、旧松方コレクション）